

九州の文化財

文化財の
保存と
修復

九州で始まった 文化財保存



三輪 嘉六

九州国立博物館館長 /
文化財保存修復学会会長

日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同庁文化財鑑査官、日本大学教授を経て、1998年より九州国立博物館設立準備室室長、2005年より現職。文化審議会文化財分科会専門委員、独立行政法人評価委員会委員(文化分科会)をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員。99年から文化財保存修復学会会長に就任。専門は考古学、博物館学、文化財学。

文化財保存 事始メ

文化財保存 九州で 始まった

本日は、日本の文化財の保存の流れのなかで、九州がどのように位置づけられてきたか、文化財保護の制度的流れを通じて探ってみたいと思います。

文化財の保存については、江戸時代以前からも相当な努力が払われてきました。奈良時代から、文化財という理念があったかどうかは別として、古いもの、先祖代々伝わったものを大事にしてきたのが日本文化の特色のひとつと考えています。ここでは、日本が本格的な制度として文化財保存に取り組み始め、展開していくなかで、どのように位置づけてきたかを九州を中心にみてみたいと思います。

文化財保護制度の変遷

日本の文化財の保存制度の展開を考えるうえで、明治元(1868)年をしっかりと位置づける必要があります。この年を境に、武家政治からいわゆる朝廷政治へと変化します。いわゆる王政復古です。封建的な武家政治そのものが大きく変化しますが、正確には慶応年間の最後の年に『神仏分離令』が布告されます。それまでは、文化が宗教をもとに形成されていく部分を重視すると、日本の文化はどちらかというとならび習合です。たとえば、隣の天満宮も天台宗の仏寺と一緒に共存していました。仏教文化が日本に伝来する6世紀中頃以前、弥生時代以来の宗教的・信仰的な展開がまさに習俗と一緒に、近世に至るまでひとつの寺院・神社のなかに、お坊さんと俗人である神官が混在する状態が続きました。しかも、寺院が優位にあったわけですのでこれをわかりやすくいうと「寺社」と表現しています。「社寺」というのは現代の表現で、明治時代以前までは、奉行所の名前は「寺社奉行」というように寺が先におかれています。それが、『神仏分離令』以降、神社と寺院との位置づけが逆転したわけです。

この流れは、欧米の文化がはいつてくる流れと一体化します。文明開化によって西欧の文物が積極的に日本にはいり、それらの文物はすべて素晴らしいというような崇拜に似た現象が起きました。それと同様の状況は、ちょうど戦後のある時期にもみられました。敗戦後、米国からはいつてくるチューインガム、チョコレートを求めた風景と重なってみえます。

文明開化で代表されるように、明治時代はどちらかというとならび西欧の文物に魅力を感じ、それを謳歌しています。第1回万国博覧会がパリで開催され、このパリ万博に日本も参加しています。また、明治6(1873)年にはウィーン万博が

開催されます。一方では日本国内でのブームとして、西洋文物がさかんにはいつてきますが、それを尊重し、憧れるというのが社会的な風潮でした。それによって必然的に、国内では旧物破壊主義的な風潮がでます。古いものは価値がないという考え方です。たとえば、奈良の興福寺の五重塔を壊そうというようなことも起こりました。そこで目指したことは、五重塔に使われている銅釘の採集です。また、鎌倉の大仏を米国に売ってしまおうという動向もありました。彦根城でもそのような風潮がありましたが、幸いなことに、当時の識者の反対などによって実行されませんでした。しかし、寺院が所有していた天平写経などが荒縄にくぐられ、道端で叩き売りされたり、多くの仏画や仏具もほとんどが放置されました。このように廃仏毀釈の風潮が大きく動いています。仏教文化を排撃するような流れが社会を風靡するわけです。

しかし、日本では仏教に基づく多くの文物が、文化として位置づいております。ヨーロッパ文化を考えるとキリスト教を除くことはできないのと同じです。また中近東の文化を考えると、イスラム教を除いては考えられません。

『古器旧物保存方』太政官布告の考え方

明治初期の廃仏毀釈の風潮で多くの寺院が荒廃しました。法隆寺も屋根が崩れそうになっていました。東大寺の南大門は、屋根が大きく傾きかかっています。大仏殿の屋根も数メートルにわたってうねっていました。

この時期、寺院の荒廃は激しく、仏教から神道に宗旨がえする状況も多くみられます。ちなみに、私が生まれた岐阜県の苗木藩では、旧藩体制のなかで仏教が排撃されて神道にかえられました。そのため、我が家もいまは神道です。そのくらい、明治初期の宗教界は荒れていました。その荒れた時代に、文化財がどうあったのが重要な問題です。

そして、明治15、16年から40年にかけて、日本が近代化を推進するとき、西洋から教師をはじめ産業界の指導者などお雇い外国人を相当雇います。その人たちによって、日本で破棄されたような仏教的なあるいは日本の伝統的な文物が、相当数、海外に流出します。明治40年から大正にかけて激しいものがあります。ご存知のように、米国のフリー美術館の収集品は、そのときに収集されたものが基本になっています。フランスのギメ美術館も同じです。日本に印刷技術をもたらし、今でいう造幣局にお札の印刷を指導したイタリアのキヨッソーネは、美術品を相当収集し、それらが現在、イタリアのジェノバでキ

文化財保存
始まった
九州で

キヨッソーネ美術館に収蔵されています。キヨッソーネ美術館は、イタリアにおけるベニスの東洋美術館とともに日本関係の代表的な美術館として位置づいています。このような日本の近代化が進む時期に、多くの伝統的な文化財が海外に流出しました。

そのような流れのなかにあつて、明治4(1871)年に、『古器旧物保存方』という制度がだされます。現在でいう文化財を「古器」「旧物」といっていますが、それらを保存するために旧物を調べるための太政官布告です。この背景には、たぶん、今でいう博物館を建設しようという雰囲気があったようです。当時、博物館といわず、この提言書では「集古館」といっています。ひとつはこうした集古館の建設を目指して、『古器旧物保存方』が制定されたわけです。

この制度では、文化財を32に分類しています。そのなかで1位に位置づけたのは神道関係のもの、つまり神社などに関係の深い祭器関係の資料です。仏教系のもとは一番最後に分類しています。そして、今日の考古学的なものも非常に尊重しています。雷斧、つまり今でいう石斧なども対象にしています。また、雷さんのへその落とし物だといわれている石鏃も含まれています。これは、各地で夕立が降ったあと、石鏃がかなり採集できたため、雷さんのへそといっていたということですが、そのようなものが割合に重要視されています。

そして注目すべきことに、化石や骨の類も保存しようと考えています。現在、文化財として骨は保存していません。化石人骨が出土したとき、当然、議論になると思いますが、日本では骨を保存することは制度的にはあまり考えていません。しかし、『古器旧物保存方』では骨、化石の類も今でいう文化財的な扱いにしたいという意気込みがみられます。画期的な考え方です。

壬申検査

『古器旧物保存方』のひとつの展開でしょうか、翌明治5(1872)年に、壬申検査が行われました。わが国最初の文化財悉皆調査です。明治5年は干支の壬申の年に当たりますので、壬申検査といっていますが、これは日本の文化財の保存問題を考えるうえで画期的な調査といえましょう。この壬申検査は畿内を中心に行われましたが、当時の行政官で、日本の博物館を考えるとき最初にでてくる町田久成や、明治時代初期の写真を残している横山松三郎、そして鮭の絵などでよく知られている画家の高橋由一らをともなって、写真や図をとり、記録的な調査をしています。ある面で、現在の文化財の基本的な調査のもとに

なるものといえます。

この壬申検査での文化財調査の内容は、現在とほとんど同じです。つまり、法量(寸法や重さ、長さなど)と材質、所蔵者、由来などを記載することにしています。このような細かな調査法は、私どもが文化財台帳、文化財調書と行って行っている調査法とほとんど変わりません。現在はパソコンに打ち込んだりしていますが、このときに調査のルールができているといっても過言ではありません。文化財の悉皆調査を行って、文化財を保存していくための基本台帳をまずつくろうとしたわけです。

壬申検査帳は、法隆寺の建物に関する台帳ですが、このような台帳が何冊も残っています。そのなかには、高橋由一の絵や横山松三郎の写真もはっています。

この壬申検査では、正倉院の開封を行っています(図1)。まず、正倉院の宝物も調査の対象となりました。明治4年に東大寺の回廊を使って、正倉院の宝物を並べ陳列会を行っています。

ちなみに、当時、このような写真を撮るとき、大きさを示すために必ず人物をいれています。明治時代初期の文化財調査の写真、特に建造物では、すべて人物が写っています。

壬申検査と九州

さて、壬申検査で九州に関係あるものは、熊本の江田船山古墳からの出土品だけです(図2)。それらは後にすべて国宝に指定され、現在では、東京国立博物館に収まっています。ち



図1 正倉院番僧

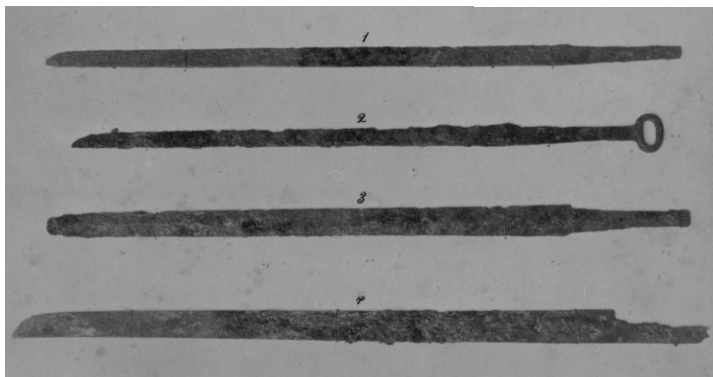


図2 直刀